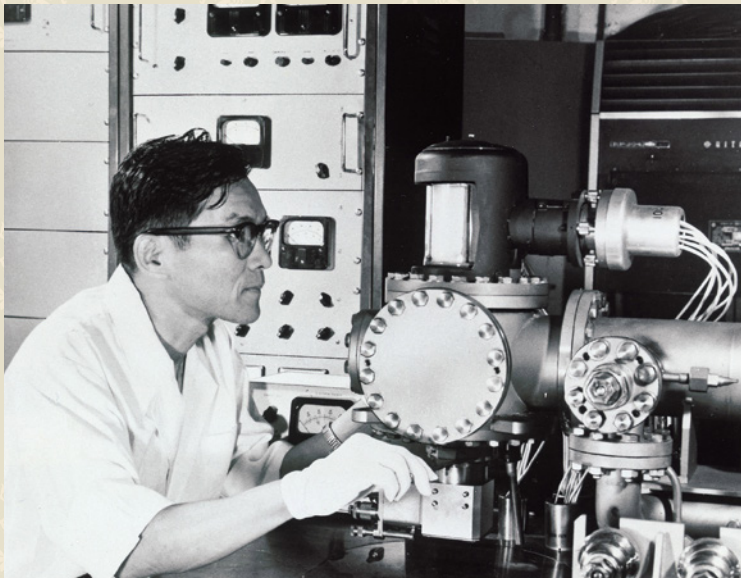


アルバックの恩人たち③

株式会社アルバック 第三代社長 はやし ちから 林 主税



日本の産業に 多大なる貢献を果たした真空の父



低速電子回析装置 (LEED) と林主税

当社第三代社長「林主税」はアルバックのルーツともいえる人物で、「真空技術で世の中を豊かにしよう」という思いと技術者のDNAは今もなお受け継がれている。技術と産業に対する林の偉業は数多く、学者としても世界的に著名であり、世界の科学者との交流も深かった。

林主税のおいたち

東京生まれ。父親の都合で小、中、高等学校は台湾で過ごす。1942年東京帝国大学理学部物理学科に入学し、1944年海軍士官として愛知県の豊川海軍工廠に赴く。戦後、大手光学メーカーに就職したが、「夕食後、同僚の社員が愚痴や雑談ばかりで、こんな連中と一生付き合っていくのでは生き残った意味がない。死んだ仲間に申し訳ない」と3日で辞めた。そして、1945年東京大学理学部物理学科研究員となった。研究生活を送っていたとき、東芝マツダ研究所の井街仁（のちにアルバック第二代社長）から「日本に真空技術を根付かせ、産業に貢献できる真空の会社を一緒につくろう」と協力要請があり、日本真空技術株式会社の設立に参加。のちの株式会社アルバックでは第三代社長（社長在任は1971～1986年）、会長・顧問を歴任した。また、1981年には、新技術開発事業団（科学技術振興機構＝JSTの前身）が始めた「林超微粒子プロジェクト」の総括責任者を務めた。他のプロジェクトに大学教授が起用されている中、民間企業の社長が抜擢されるのは異例であった。

●無限に広がる真空の可能性

「真空技術の発展には3段階があります。最初の段階は〈真空をつくる時代〉、次の段階は〈真空のアプリケーション（利用）の時代〉、そして3番目は〈人類がカプセルに乗って宇宙に飛び出して行って、無限に広がる真空の場で実験する時代〉というわけです」これは林主税が1960年頃、ある雑誌に依頼されて、「真空技術の発展」について執筆したものである。

アルバックが設立された1952年頃の真空技術は、「真空をつくる」ことから「真空を利用する」までの、その中間の黎明期であった。このような真空技術に対する壮大なビジョンをもった林主税とはどのような人物であったのだろうか。

●根っからの研究者と 大学発の企業

人生の多くを研究に没頭していた林主税も、「じつは中学の頃は物理だけが飛びぬけて悪かった」と語っている。それは決して出来が悪いなどということではなく、むしろ逆で、「なぜ重力があるのか」「なぜ光があるのか」と物理の領域から哲学に入り込んでしまっていたからだったそうだ。高等学校ではやたらに哲学書を読んだという。

戦後、林は東京大学の嵯峨根研究室で原子核物理の勉強をしていたが、学者になろうと思っていた訳ではなかった。林の価値判断の基準は、大学や企業の区別ではなく、「面白いかどうか」なのだった。

そんな中、林は29歳の時に日本真空技術株式会社（現・アルバック）の設立に声を掛けられる。はじめは10人でのスタートで、研究者を中心とした「大学発ベンチャー企業」の先駆けであった。アメリカでは学者が企業を経営するケースが多いが、日本では極めて珍しかった。

最初の15年間は実質的に赤字の連続だった。研究に突出した企業は経済的困難に突き当たりがちだが、それでも生き延びてこれたのは、従業員の努力もさることながら、松下幸之助氏（パナソニック創業者）をはじめとする発起人支援者のおかげであった。資金が尽きると増資をさせてもらい、その増資のお金で少しだけ配当を払うことを繰り返しながら、何とかしのいでいた。

●真空技術で世の中を豊かにする という使命感

バックグラウンドに物理学がある林

は、本能的に重要なことを追求していくことは非常に得意だったが、さらにそれを突き詰めて「やらなければ」と思ってしまう性分であった。だが、研究のような成果があがるまでに20年、25年かかるサイクルで世の中の経済は回っていくはずもない。新しいものを作ってマーケットを開いていかなければ、大きな企業にもなれず、お金もたいして入ってこない。だがどうしても研究の方を頑張ってしまう、というのが当時の日本真空技術であり、その存在意義を支えてきたものでもあった。

儲け話よりも研究開発を優先しようとする林に、時には支援者である松下幸之助氏や弘世現氏（日本生命社長）がアドバイスをしたこともあった。のちに林は自伝でこう記している。

の時には従業員に向かって「海外に行ったら必ず友達をつくってきなさい」と頻りに口にしていた。

そんな林は宇宙飛行士の毛利衛氏ともつながりがあった。同じ日本真空学会の仲間でもあったことから交流があり、1993年発行の本広報誌「巻頭対談」でも二人は対談をしている。宇宙飛行士になる前は北海道大学の高真空研究室で働いていた毛利氏と、大学の研究室で真空について学んだ林は意気投合したのだろう。

さらにその後林は、アルバックの本社・工場がある神奈川県茅ヶ崎市で、公益財団法人日本宇宙少年団茅ヶ崎分団の初代分団長を務めた。宇宙飛行士の野口聡一氏が茅ヶ崎市出身であることから、「宇宙のまちちがさき」を世に広めるべく、同分団は現在でも茅ヶ崎市と共に宇宙を身

分だけなら」と快諾。思わぬハプニングで子供たちは大喜びだったという。

●林真空イノベーション基金と受け継がれる思い

研究開発には一切の妥協をせず、間違ったものは認めない、という原則を貫き通してきた林であるが、一方で研究を志す研究者への支援は惜しまなかった。自身が学んだ東京大学生産技術研究所へ個人で寄付金を提供し、「林真空イノベーション基金」として運営されている。主な事業は、①真空に関する展示会の開催、②真空に関する国際会議、③東南アジアからの留学生支援であるが、③では、大学でサイエンスを教えるだけでなく企業でエンジニアリングも教えて



写真前列中央が毛利氏、左端が林主税



1980年代、当社株主総会の席上、アルバックの設立発起人でもあり、社外取締役でもあった松下幸之助氏（写真左、パナソニック創業者）に長年の支援に対して感謝を述べる林社長（写真右）

「だんだん会社での地位が上がっていききましたが、僕は使命感で仕事をやってきました。真空技術をもって日本の経済や産業の復興に役立ちたい。それが日本人のために必要だからやるという使命感です。」（白日社『日本真空の恩人たち』P.217）

●林主税と宇宙と真空

林は、義理堅く真面目で、多方面との交流があり、従業員にもよく目を向けている人であった。グローバルな目線も持ち合わせており、社長

近に感じられるような様々な活動が行われている。

その茅ヶ崎分団の設立間もない頃、林の顔の広さと人望の深さが伺えるこんなエピソードがある。

林主税分団長を筆頭に子供たちを連れて筑波のNASDA（現在のJAXA）へ見学に行ったことがあった。多忙のため毛利氏とはお会いできないと事前に言われていたが、毛利氏が歩いているところを子供が発見し、林は事務局へ「少しの時間でも良いから子供たちに会ってくれませんか」と交渉した。すぐに毛利氏から「10

欲しい、と林が東京大学に託したことから、現在ではアルバックがその意志を受け継ぎ、海外からのインターンシップ生の受け入れ、次世代科学技術を担う若手人材の育成など真空技術継承につながる活動を行っている。

林の「世の中の役に立ちたい」という使命感で仕事をする思いと、研究で新しいことに挑戦していく創造のDNAは、まさにアルバックのルーツであり、創業から70年近く経った今も受け継がれている。